幻桃「全国大会 in 大垣」に参加して

吉田　誠治

二〇二四年四月二一日、前々から楽しみにしてきた幻桃全国大会は、岐阜県大垣市のクインテッサホテルを会場に、予定通りきっかり十二時に開会の宣言がなされ幕が開いた。

最初は歌人の笹公人氏から「短歌の言霊」という講演があった。講演では、母音に籠った意味の秘密を振り出しに、歌が三十一文字となった秘密、リフレインの響き、祝いや願いごとを籠めた歌、そして五七五七七にはパワーが宿ることなど、縦横無尽にときにユーモアを交えて歌が語られた。その巧妙な口調から歌の持つ奥深さや摩訶不思議な世界に引き入れられて、熱心に聴くことが出来た。

この後は本題の歌会となり、参加した三十九名の短歌が、順次、披講の方から読まれていく。一つの歌に対して、参加者、パネラー、笹氏の順にステップを踏んで歌評を得ていくうち、作者の思いや歌への昇華が見通せるものとなっていった。中でも笹氏の評は、作者の意を尊重しつつシンプルに述べられ、手直しを示唆するときも「あえて直すなら」という言い方で、聴いている方も納得しやすく心地よいものであった。

歌会のラストには、全国大会に初めて参加した方の紹介コーナーがあり、該当する人（私も含む）が前に並んで自己紹介を行った。メンバーへの「よろしく」というあいさつとともに短歌との関わりを聞いているうちに、こうして新しい人が入ってくることは幻桃にとって本当にいいことだという思いが強くなった。

そのすぐ後に歌会に参加した全員が揃っての写真撮影があり、そ

れからしばしの待ち時間があって、ホテルの宴会ルームで懇親会が始まった。今回、歌会のみ参加の方が十名ほどおられ、二十九名となった懇親会の参加者は、くじ引きで四つの丸テーブルに振り分けられた。乾杯のあと、お酒を飲みながらの食事はつい口が滑らかになり、同じテーブルに座る普段は接する機会のない方々と色々な話をしながら、なごやかな夕餉の時間は過ぎていった。

懇親会もたけなわというところで、テーブル対抗の作歌ゲームに入った。やり方は、笹先生の歌から初句をいただき、各テーブルが別々に七五または七七を作って歌を仕上げるというもの。意味不明で歌とも呼べないものが出来ると思いきや、笹先生も感心するなかなかいい歌が出来上がり、懇親会場全体が大いに盛り上がった。全部で八首作られたが、その中の二首を挙げておく。

行き先を決めずに北に走りたりまた会いましたあなたとわたし
しのびよる心のすきまうめるごと女六人男がひとり

二日目の散策には宿泊した十九名が参加、朝食の後、ホテルからタクシーに分乗して「奥の細道むすびの地記念館」に向かった。記念館では、芭蕉が百五十日かけてたどった江戸から大垣への旅について、道中の景色と詠んだ俳句を四編に分けてまとめた三次元映像を楽しんだ。全編で一時間となる重厚感のある物語映像である。

展示物の方も見て記念館を後にし、ゆっくり流れる水門川と川縁の木々が青葉豊かに茂る姿を見合わせながら、めいめいのペースでホテルまで歩いて戻り、結びの地の散策を十分堪能した。

大会を楽しく終えられたのは、岐阜歌会を始め、東京歌会、名古屋歌会の担当された皆様のお陰で、あらためて感謝いたします。